様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２０日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０４０１０２９
研究課題名（和文）　西アジア新石器時代における社会システムの崩壊とその再編

研究課題名（英文）Collapse and Realignment of the Social Systems in Neolithic West Asia

研究代表者
三宅　裕（MIYAKE YUTAKA）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：６０２６１７４９

研究成果の概要（和文）：
トルコ共和国においてサラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡の発掘調査を実施し、新石器時代における社会システムの再編期に当たるとみられる時期の様相を、具体的資料を基に明らかにすることができた。土器新石器時代には農耕・牧畜に基盤を置く社会が確立されていたにもかかわらず、遺跡の規模、集落構造、工芸技術などにおいて先行する先土器新石器時代とは大きく様相を異にすることが確認され、この時期に大きな社会的変容が生じていたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
Archaeological excavations were carried out at Salat Camii Yanı, a Pottery Neolithic site in southeastern Turkey, in order to understand the social aspects of the period with concrete evidence. Although plant cultivation and animal husbandry were already established in the Pottery Neolithic period, some kinds of regression which are observed in the settlement size, settlement structure and the manufacturing techniques of various objects, comparing to the previous Pre-Pottery Neolithic, illustrate that significant social transformation occurred during the Neolithic period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
２００９年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
２０１０年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
年度			
年度			
総　計	12,800,000	3,840,000	16,640,000

研究分野：西アジア考古学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：考古学、トルコ、新石器時代

１．研究開始当初の背景

西アジアの新石器時代は、600 万年にも及ぶ人類史の中でも特に重要な画期であったと評価することができる。それまで採集・狩猟によって食糧を獲得してきた人類が、定住生活を営み、農耕・牧畜によって自ら食糧を生産するようになったからである。この時代については、これまで半ば自明のことのように比較的単純な平等主義的社会であったとみなされ、都市の成立に代表される複雑な社会へと発展していく基礎が築かれた時代と位置付けられてきた。ところが、実際に遺跡の調査が進むにつれ、こうした図式はあまりにも単純すぎることが明らかになってきた。

新石器時代の前半にはすでに高度に組織化された社会の存在を示す証拠が認められるようになり、また新石器時代の半ばには社会システムの「崩壊」が起きていた可能性が見えてきたからである。

２．研究の目的

これまでの研究の最大の問題点は、先土器新石器時代の研究ばかりが先行し、土器新石器時代の具体的な内容がほとんど明らかにされてこなかった点にあった。土器新石器時代については、実態の解明がほとんど進まないまま、社会システム崩壊後の混乱期または停滞期とみなされる傾向が強かった。そこで、本研究ではトルコ共和国において土器新石器時代の遺跡の発掘調査を実施し、その状況を具体的資料とともにできるだけ正確に把握し、より実態に即した形でその時代の評価をおこなうことを目的とした。

３．研究の方法

トルコ共和国南東部、ティグリス川流域に位置する土器新石器時代を中心とするサラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡（図 1）において発掘調査を実施した。現地でのフィールドワークは、各年度とも 7 月中旬から 9 月上旬までの約 2 ヶ月間おこなった。

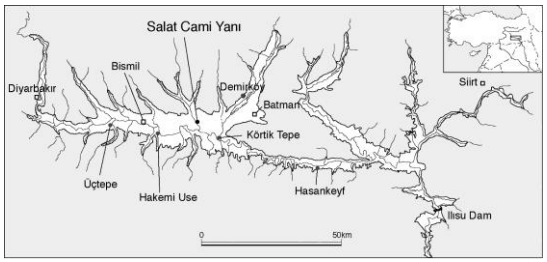

図１　遺跡の位置

発掘調査は、トルコ政府当局の意向もあり、現地のディヤルバクル博物館との共同調査という形をとって進めた。調査国の規定で、出土した遺物はすべて現地の博物館に収めることが定められているため、基本的に遺物の実測や写真撮影、ならびに分析・整理作業は、各年度の発掘調査終了後に一定の期間を設けて現地にておこなった。ただし、年代測定用の資料、理化学的分析用の資料、植物遺存体、一部の動物骨については、トルコ政府当局の許可を得て日本に持ち帰り、分析作業を進めた。

発掘調査期間以外では、現地調査から持ち帰った図面・写真資料の整理作業をおこなうとともに、そうした資料を基に遺物や遺構の分析作業を進めた。また、トルコ共和国のほか、シリア、イラクなど周辺の国々でこれまでに調査されてきた土器新石器時代遺跡の内容把握に努め、サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡の調査において得られた資料との比較をおこなった。さらに、先行する先土器新石器時代の遺跡についても資料を収集し、社会システムの変動の様相について考察を進めた。

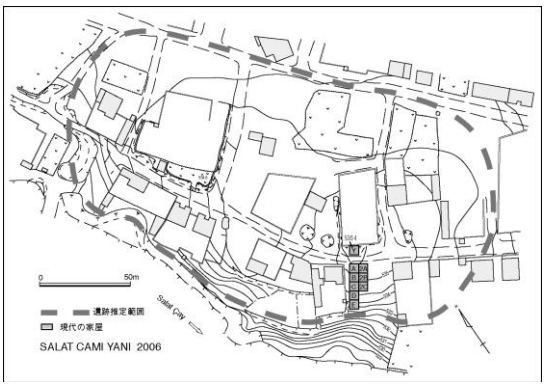

図２　遺跡平面図

具体的には、主に以下の 3 つの面に焦点を当てて研究をおこなった。1）集落構造：土器新石器時代の遺跡を発掘し、集落構造に先土器新石器時代のような規制がみられないのかどうか、公共的建築物は本当に存在しないのかどうか検討した。2）工芸技術：長距離交易による物資の獲得の問題も含め、土器新石器時代におけるもの作りのあり方の解明に努めた。一見後退したように見える装飾品や石製容器、銅利用の内容を明らかにし、先土器新石器時代とどのような点で異なるのか検討した。また、土器の出現が社会的にどのような意味を持っていたのかについても考察した。3）生業：新石器時代は一般に農耕・牧畜が開始された時代として定義されるが、実際には食糧生産への転換は数千年の時を経て徐々に確立されていったことが明らかになっている。遺跡から出土する植物遺存体と動物骨の分析を行い、野生資源の利用も含めその社会を支えた生業の様相を明らかにし、生業と社会システムの関係について検討した。

４．研究成果

西アジアの新石器時代は、一般に土器の出現を境として、先土器新石器時代と土器新石器時代の二つの時期に大きく区分される。近年、特にアナトリア（現トルコ共和国）において先土器新石器時代の調査が進み、従来の新石器時代観を大きく揺さぶるような状況が明らかになってきた。

1）集落規模：後続する土器新石器時代の遺跡が一般に小規模であるのに対し、先土器新石器時代の集落規模は大きく、中には「メガ・サイト」と呼ばれる 10 ha を超える遺跡が存在する。人口規模も当然大きかったものと考えられる。2）集落構造：規格性の高い住居が一定方向に揃って並ぶなど、整然とした形で集落が構成される。集落全体を統括する

ような、強い規制やルールが存在していたことが想定される。3）公共的建築物の存在：一般の住居とは明らかに異なる特殊な建物が、集落内に1基だけ認められる。集落全体を統合する役割を果たした儀礼用の施設であったと思われる（神殿とみなす意見もある）。4）祭祀センターの存在：ギョベックリ・テペ遺跡からは規模の大きい特殊な建物がまとまって検出され、当時の祭祀センターであった可能性が指摘されている。個々の集落レベルにとどまらず、ある一定の地域を統括するような社会組織の存在が想定される。5）高度な工芸技術と長距離交易の発達：自然銅や孔雀石（酸化銅鉱）などの銅利用、石製容器や装飾品をはじめとする工芸技術の発達が顕著に認められる。長距離交易による物資の獲得（貝や黒曜石など）も盛んであった。

こうした先土器新石器時代の社会の姿は、単純な農耕村落社会のイメージからは大きくかけ離れたものであり、人口の集中、集落や一定の地域を統括する複雑な社会組織の存在、専業的な職人、長距離交易の発達などは、いずれもこれまで都市社会の指標とされてきたものであった。ところが、同じ新石器時代であっても次の土器新石器時代になると、その姿は大きく一変してしまう。本研究で発掘調査をおこなったサラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡は、まさにこの時期の遺跡であり、新たに得られた資料は数多くの新しい知見をもたらしてくれた。

微地形や遺物の分布範囲などからサラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡の規模は、およそ2 haほどであると推定された。他の土器新石器時代の遺跡も2 ha前後のものが中心であり、土器新石器時代の集落規模は一般にこの程度であったと思われる。これは、10 haを超えるような大型の遺跡が存在する先土器新石器時代の遺跡とは様相を大きく異にする。したがって、集落の規模は明らかに縮小しており、居住人口も前時代に比べて少なかったものと考えられる。

発掘調査の結果、住居跡、炉跡、埋葬などの遺構が数多く検出され、土器新石器時代の集落構造を把握することが可能となった（図3）。その基本的な構造は、ピゼと呼ばれる土壁によって構築された建物が独立して配され、その間のオープンスペースに2種類の炉跡が認められるというものであった。建物が廃絶される際に建物内部が意図的に埋められ、乳児・幼児の埋葬がまとめて行われたことも明らかになり、この時代の集落のあり方を理解する上で貴重な資料が得られた。しかし、いずれも各世帯が日常的に使用する遺構ばかりであり、先行する先土器新石器時代の遺跡にみられるような集団で儀礼を営むための公共的建築物は確認されなかった。また、各遺構の配置にも先土器新石器時代のような規則性あるいは規制の存在も認めることはできなかった。

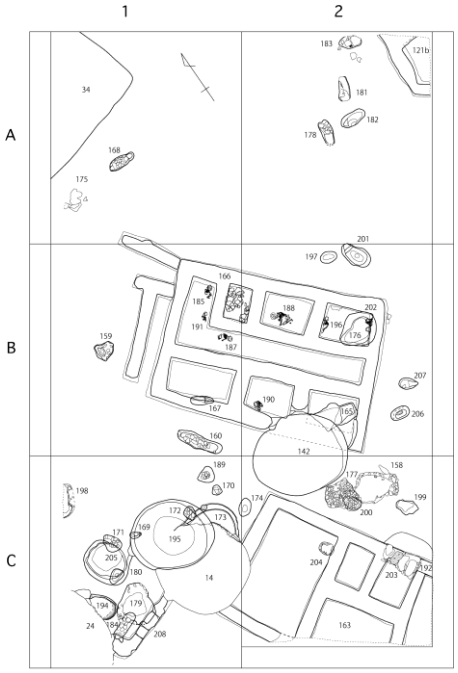

図3　検出された遺構（第1期）

遺物の面からも、多くの新しい知見が得られた。この地域最古の土器群がまとまって検出され、西アジアにおける土器の起源に迫る資料が得られたことは、本研究の副産物ともいえる大きな成果であった。中には煮炊きに使用されたと考えられる痕跡の認められるものもあり、理化学的な分析も援用し、土器の機能・用途を明らかにする研究を進めているところである。

図4　出土土器（第1期）

また、得られた土器の分析によって、南東アナトリア地域と北メソポタミアとの関係が明確になった。本遺跡で確認された鉱物を混和する磨研土器（第1期）からスサを混和する粗製土器（第2期）、「プロト・ハッスーナ」（第3期）へという土器の変化は、北メソポタミアでもほぼ同じように辿ることが

できる。単に土器の一部に類似する要素が認められるのではなく、土器群全体が併行するように同じ変化を辿っているということは、両地域が文化的に密接な関係にあったことを示している。

さらに、そうした状況は土器だけにとどまらず、他の遺物にも見て取ることができる。打製石器に認められた、排他的とも言えるフリントと黒曜石の利用法の違い、剥片製作を主体としたフリントの利用、砲弾形石核を用いた黒曜石製の石刃製作という特徴も、北メソポタミアの遺跡との間で共有されているものである。また、小型の石製容器や土製ビーズなどの小遺物も北メソポタミアの遺跡に類例を見出すことができ、建物を装飾する彩色壁画も両地域に共通して認められる（図5）。したがって、土器新石器時代前半において南東アナトリアのティグリス川流域は、北メソポタミアと歩みを共にするひとつの文化圏を形成していたと理解することができる。南東アナトリアは、実質的にはメソポタミアとして扱うべき地域であることが明らかになったと言うことができる。

図５　彩色壁画片

その一方で、先行する先土器新石器時代には数多く認められた威信財的性格をもつ遺物はほとんど出土しないことも明らかになった。ウルス･ダムの水没区域でも、先土器新石器時代Ａ期の遺跡キョルティック･テペからは、優美に装飾された石製容器やビーズなどの装飾品が大量に出土し、大きな注目を集めている。しかし、土器新石器時代の遺跡からはこうした遺物はほとんど出土せず、それはサラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡でも確認することができた。

以上のことから、土器新石器時代における集落規模の縮小、公共的建築物の消失、威信財の減少という姿が明確となった。高度に複雑化した先土器新石器時代の社会システムが、その後期あるいは末期に崩壊してしまったと考えることができ、これまでも「新石器時代の崩壊」と呼ばれていた現象が確かにこの時期に認められることを具体的な資料に基づいて明らかにすることができたと言える。

しかし、土器新石器時代を単に社会システム崩壊後の混乱期あるいは停滞期と捉えるだけでは十分ではないと思われる。これまで西アジアの新石器時代は、チャイルド（G. Childe）の主張に従って、農耕牧畜という食糧生産の開始によって定義されてきた。しかし、動植物資料の実証的研究が進んだことにより、今では農耕牧畜が確立されたのは先土器新石器時代の後半（PPNB 中期から後期）であったと考えられるようになっている。先土器新石器時代の複雑な社会を生み出し、それを支えたものが必ずしも農耕牧畜という生業ではなかったことになり、むしろ農耕牧畜が確立された段階で「新石器時代の崩壊」が起こっているようにさえみえる。実際、サラット・ジャーミー･ヤヌ遺跡における調査おいても、出土した動物骨の分析からヤギ、ヒツジ、ウシ、ブタがすでに飼育されていたことが確認されており、その割合は出土した動物骨の 95%近くにもなる。また、植物遺存体の分析からは、コムギ、オオムギやマメ類なども栽培されていたことが明らかになっている。土器新石器時代は、農耕と牧畜に基盤を置いた社会であったことは間違いない。農耕牧畜という新しい生業の確立が、社会システムの面ではむしろマイナスに働いたようにみえるこうした現象は、農耕・牧畜が果たした役割を過度に強調する傾向にあったこれまでの考え方に、厳しく見直しを迫っていると言えるだろう。

その一方で、「崩壊」後の社会が農耕牧畜を基盤とするものならば、それはその後ハラフ、ウバイド期を経て都市の形成へと至る、新たな社会システムの再編期に当たると評価することができる。チャイルドが定義した新石器時代は、この時期に始まったと考えるべきなのかもしれない。しかし、そう積極的に主張するためには、まだ多くの資料を蓄積させていく必要がある。特に、これまでは先土器新石器時代の調査ばかりが先行し、土器新石器時代の研究は大きく立ち遅れている感があった。その意味でも、サラット・ジャーミー･ヤヌ遺跡をはじめとするこの時代の遺跡の調査は、大きな意義を有していると言えるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

① Y. Miyake, Excavations at Salat Camii Yani 2004-2006: A Pottery Neolithic Site in The Turkish Tigris Valley. In Matthiae, P. et al. (eds.),

Proceedings of the 6th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East. Volume 2 Excavations, Surveys and Restorations、査読無、2010、 417-429.

② 三宅　裕、西アジアにおける土器の起源を探る：トルコ、サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡第5次調査（2009年）、第17回西アジア発掘調査報告会報告集、査読無、2010、43-48頁.

③ Miyake, Y. 2008 Yılı Diyarbakır İli, Salat Camii Yanı Kazısı. 31. Kazı Sonuçları Toplantısı 2. Cilt, 査読無、2010, 435-450.

④ 三宅　裕、前田　修、田尾誠敏、本郷一美、丹野研一、吉田邦夫、サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡（トルコ共和国）発掘調査概報：2004-2008 年、筑波大学先史学・考古学研究、査読有、20号、2009、75-112頁.

⑤ Miyake, Y. 2007 Yılı Diyarbakır İli, Salat Camii Yanı Kazısı. 30. Kazı Sonuçları Toplantısı 2. Cilt, 査読無、2009、101-112.

〔学会発表〕（計10件）

① Miyake, Y. Recent Progress in Pre-Pottery Neolithic (PPN) research in southeastern Anatolia, The Pre-Pottery Neolithic in West Asia: Göbekli Tepe and its environs, 2010年12月16日、筑波大学.

② Miyake, Y. 2009 Yılı Diyarbakır İli, Salat Camii Yanı Kazısı, 32. Uluslararası Kazı, Araştırma ve Arkeometri Sempozyumu, 2010年5月26日、 イスタンブール.

③ 三宅　裕、西アジアにおける土器の起源を探る：トルコ、サラット・ジャーミー・ヤヌ遺跡第5次調査（2009年）、第17回西アジア発掘調査報告会、2010年3月27日、東京.

④ Miyake, Y. Emergence of Pottery as a Cooking Pot, International Symposium on the Emergence of Pottery in West Asia, 2009年10月30日、 筑波大学.

⑤ Miyake, Y. Regional Variation between the northern Levant and Upper Mesopotamia, Interpreting the Late Neolithic of Upper Mesopotamia, 2009年3月28日、ライデン大学.

〔その他〕
ホームページ等
http://www.histanth.tsukuba.ac.jp/~tap/scy_JP/index.html

６．研究組織

(1)研究代表者

三宅　裕（MIYAKE YUTAKA）
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：60261749

(2)研究分担者

本郷　一美　（HONGO HITOMI）
総合研究大学院大学・先導科学研究科・准教授
研究者番号：20303919
常木　晃　（TSUNEKI AKIRA）
筑波大学・大学院人文科学研究科・教授
研究者番号：70192648
松本　建速　（MATSUMOTO TAKEHAYA）
東海大学・文学部・准教授
研究者番号：20408058
丹野　研一　（TANNO KENICHI）
山口大学・農学部・助教
研究者番号：10419864
津村　宏臣　（TSUMURA HIROOMI）
同志社大学・文化情報学部・准教授
研究者番号：40376934